

## 選んだ責任

三年 小林莉瑠

私が小学校一年生の頃、我が家に二匹の犬がやってきた。体は小さいけれど、嬉しいときも、悲しいときも、どんなときでも私を包み込んでくれる。そんな、暖かくて大きな存在だ。そばにいてくれるだけで、私たち家族の心が温まる。

去年、一匹の犬が心臓の病気であることがわかった。それからしばらくして、急にとても苦しそうにし始めたことがあった。病院へ連れて行き、そのときに獣医さんから告げられた言葉、「次、また同じような状態になったら、覚悟を決めておいた方がいいかもしれません。」

とても怖かった。この幸せな毎日が、ある日突然、失われてしまうのかもしれない。そのとき思った。私は幸せだけど、犬は幸せなのだろうか。ペットショップで見つけ、一緒に暮らし始めた。着せたい服を着せ、可愛いと思う姿にトリミングしてもらおう。それらは全て、私たちのやりたいことだ。私たちは飼いたいと思う犬や猫などのペットを選ぶことができる。何をさせるのかも選ぶことができる。しかし、犬や猫など、ペットになる動物たちは、飼い主も、着る物も、食べる物も、何も選ぶことができない。それは、幸せなのか。『動物を飼う』と言うけれど、その表現の仕方は間違いで、『動物を飼わせてもらう』

と言う表現こそが正しい言葉なのではないか。そうであるのなら、自由の少ない動物たちの限りある日々の中で、幸せを見つけ、彼らに与える。これこそが、私たちが動物を飼うときに背負わなければならない責任なのではないかと私は思う。

私は、今でも一緒に暮らしている犬が、いつ、どうなるのかわからないという不安がある。犬自身も、それは同じかもしれない。お別れすることについては考えたくないけれど、たとえ、どんなに小さな命であっても、生き物を家に迎え入れるのなら、いつかは、彼らとお別れをしなければならないときがやってくる。だったら、せめて、最後まであふれるほどの幸せでいっぱいにしてあげたい。犬にとって、何が幸せなのか、はつきりはわからない。でも、愛情をたくさん分け与えてあげることができる。飼い主を選ぶことはできなくても、最後のお別れするときには、私たちが家族で良かった。そう思っしてほしい。

世界中で、動物への虐待はなくならない。だから、そういうことをする人達に伝えたい。動物と暮らす、育てていくと決めたのなら、選ばせてもらったことに責任を持ち、最大の愛情を彼らに分け与えてほしい。そして、最後には幸せでいっぱいの生涯だったと思えるようにしてあげてほしい。